

ジュリー ある少女の愛の物語

アイリーン=ハント作 足沢良子訳



世界の児童文学名作シリーズ

ジュリー ある少女の愛の物語

アイリーン＝ハント作

足沢良子訳

松田 穰絵



講談社

933 ハント, アイリーン

ジュリー ある少女の愛の物語 足沢良子訳

世界の児童文学名作シリーズ

講談社 1972年

262 p 23 cm

(原題) Up A Road Slowly : by Irere Hunt

ハント, アイリーン

ジュリー しょうじょ あい ものがたり ある少女の愛の物語

定価 620 円

昭和47年2月20日 第1刷発行

訳者 たみさわよしこ 足沢良子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号 112

● 電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 凸版印刷株式会社

錦印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

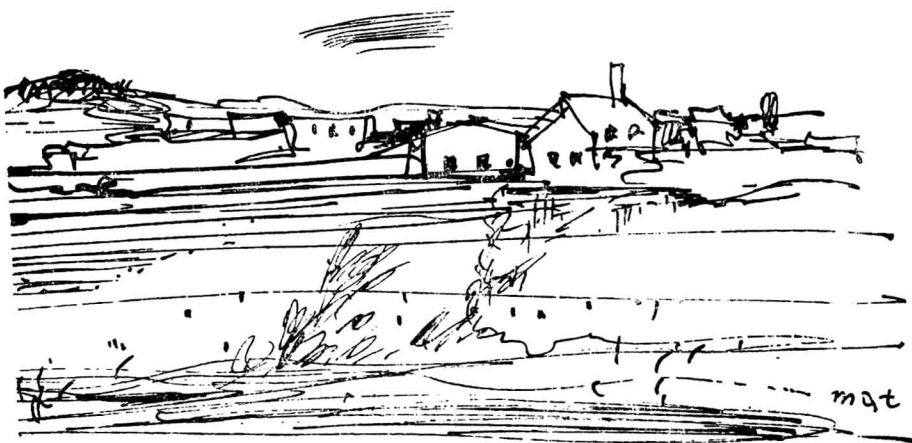
Printed in japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8097-195692-2253 (0) (児1)



11.	10.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
門出	ビロードの上着	さわやかな朝	つらい日々	ハスケルおじさんの苦しみ	古いものと新しいもの	エルディング夫妻の訪問	アギー、ごめんなさい	ローラの結婚	学校生活	ある日、とつぜんに
239	219	193	159	144	120	93	67	43	24	8



装丁 きょうてい
さし絵 さしえ

安野光雅 あんのみつまさ
松田 穰 まつた みちる



この物語のおもな人々

髷 コーデリアおばさん
ジュリーをそだてる、しっ
かりした性格の人。



髷 エルティンク夫妻
ジュリーたちの近所にひっこして波風をたてる。



髷 ダニール・トレポルト
ジュリーのおきななじみ。



髷 アギー・キルビン
ジュリーの同級生。まづし
く、みんなにきらわれる。



變アリシア・アリスン
高校の先生。ジュリーの継
母となる。

變ハスケルおじさん
酒ずきで変人。ジュリーのよき理
解者。



變ジュリー・トレリング
この物語の主人公。

變ブレット＝キングズマン
ジュリーの同級生。美男
だが、なまけもの。

Up A Road Slowly

by

Irene Hunt

Text © 1966 by Irene Hunt

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo, 1967

ジュリー
ある少女の愛の物語



アイリーン・リハント・作
足沢良子・訳

1. ある日、とつぜんに……

三人の子どもは、明るい十月の日をあびて、わたしの家の門の外にじっと立っていた。しばふの敷き石づたいにゆっくり歩いていくわたしを一步一步見まもって、まるでショーウィンドーの小さな像のように動かなかった。

わたしは、母がかかったのとおなじ病氣にかかり、まだすっかりなおっていないかった。だから、近所の友だちと元氣に遊んだのは、もうだいふ前のことだった。

その日の午後は、強い風がふきまわっていた。かしのかれ葉が一枚ふわふわと落ちてきて、三人の中の赤毛の男の子の髪にちょこんとのつたのおぼえている。かれ葉は日にかがやいて、まるで女の子の大きなひらべったいリボンのように見えた。そんなリボンをつけた男の子のまぬけなようすがおかしくて、わたしは思わず声をたててわらいそうになった。けれど、わらいはしなかった。声をたててわらうようなときでないことを、すぐ思い出した。

わたしたちは、なにか大きなわからないことに出あったときのように、ぼかんとして、たがいにただ見つめあっていた。

わたしたちは、暑い八月のころには、夕がたおそくまでみんなで遊んだものだった。けれど、いま、三人



の子どもは、かなしそうにわたしを見ていた。そして、わたしはもう、友だちではなくなってしまった。

三人の子どものまじめくさった顔つきには、おかあさんたちからいわれていることばが、ありありと感じられた。

「ジュリーにしんせつにしてあげなくちゃいけませんよ。——とってもしんせつにね——。」

三人の中のいちばん小さい子が、やっと口をひらいた。その子は五歳かそこの女の子で、かん高い声だった。まるで、ふしぎなうわさの真相を知ろうと決心したように、かたい表情でいった。

「もう、ここからいなくなるのね。」

そのいいかたは、質問するというより、なにかをきっぱりいいわたしというふうだった。

「いなかで、おばさんといっしょにくらすんですってね。」

そのときから、わたしはものすごいさけび声をあげるようになったのである。

家の中に、なにかとてもわるいことがもちあがっていることはわかっていて、けれど、わたしを追いはらおうとしているとは知らなかった。

この二日間、家にはおおぜいの人々がやってきた。コーデリアおばさん、かかりつけのお医者、だれだか知らない人、近所の人たち……そのだれもが、しずんだ青白い顔をしていた。

「アダムはひとことも口をきかない。」

だれかがそうささやいたのを、わたしはきいた。

「すわったつきり、じっとものを見つめている。」

話題になっているのは父だった。

ほかのささやきもきこえた。

「医者がいには、ジュリーはヒステリーのようなもんだってよ。よくめんどろをみてあげなくちゃいけないよ、ローラ。」

家の中には、みながせわしく動きまわっているのに、なにかしげさがひそんでいた。

わたしはその午後、なくなった母の小さなぬい物べやに、長いことすわっていた。そして、つなにかかっているシャツが風にあらわれ、大きなしわになっているのを見つめていた。じっと見つめていると、それがきみょうなものに見えるきた。しわというしわが、わたしに向かって、いじわるそうに、にくしみをこめて齒をむき出し、わらいだすのだった。

わたしに話しかけた女の子は、わたしのものすごいさけび声をきいて、びっくりしてしまった。

わたしは、女の子のいったことがほんとうかもしれないと思ったので、その子にくらしかった。だからものすごいさけび声をあげたのだ。もし門をのりこえることができたなら、きっとその子をぶっただろう。

女の子は、両わきの子どもの手をにぎりしめた。三人はおどろき、あわてふためいて、にげていった。

そのとき、わたしのそばにいた兄のクリストファが、大声でローラをよんだ。姉のローラはいそいでやってきて、わたしに声をかけ、腕の中にだきあげてくれた。ローラは、十七歳だった。美しい、わたしの大きな姉だった。強情でわがままなわたしを思いどおりにあつかえるのは、からだの弱かった母でもなく、仕事熱心な教授の父でもなく、この姉のローラだった。ローラのおかげで、かんしゃくもすぐにおさまったものだった。



わたしはたいいていのおとなからすかれなかったけれど、姉だけにはかわいがられていた。

ローラは、花壇が見おろせる自分のへやへ、わたしをだきかかえていった。まどがあいていて、ベッドのそばのカーテンをゆらす風に、秋のかわいたにおいがした。ローラは、わたしをそのベッドに横たえた。

わたしは、ローラを苦しめているかん高いさけび声を、自分でなんとかおさえようと思ったが、どうすることもできなかった。

しばらくして、医者がやってきたことをおぼえている。そして、むりやりに、水といっしょに薬を飲まされた。そのあと、わたしはねむってしまった。ねむっているあいだに、あの門のところで、五歳の女の子がいったことがほんとうになってしまった。つぎの朝、わたしが目をさますと、ほんとうにいなかのおばさんの家にいたのだから。おばさんの家は、わたしがずっとおさないころに住んでいた、小さな大学町から五マイルはなれたところにあった。

なにか、虫の知らせが、なにもかもほんとうになっていくように思えた。そして、わたしの世界が、土台からくずれ落ちていくのだ。

その朝、コーデリアおばさんは家にはいなかった。

目をさましたとき、ベッドのそばにいたのは、青いしまの洋服を着て、白いエプロンをつけたやさしそうな、ふとった女の人だった。

わたしは、うすうす、この人を知っていた。ピーターズ夫人といって、その主人といっしょに、コーデリアおばさんとハスケルおじさんが共同で経営している農園を、何年もまかされている人だった。しんせつな人だったけれど、ちょっとしたくせが、わたしをいらだたせた。それは、あまりにもひっきりなしにわらう

ことと、まるで、いつてはいけないことばのように、「わたくし」という代名詞をさけることだった。

「さあ、ビーターズ夫人がジュリーちゃんにうれしい朝ごはんを用意しましたよ。きれいな洋服を着て、お食事がすんだら、ビーターズ夫人がつれてきたお友だちと外で遊べますよ。おもしろいことがいっぱいありますよ。ね、そうでしょ。」

「遊びたくなかないわ。それに、朝ごはんなんかいらぬい。」

と、わたしは、無表情にいった。

ビーターズ夫人はそれにはなんとも答えず、にわとりがなくなのように、くつくつと口の中で声をたて、わたしが洋服を着るのをてつだった。

「さあ、かわいいくつ下とくつをはいて。ね、それからきれいベティコートですよ。」

ビーターズ夫人はいった。

医者に飲まれた薬のために、まだつかれがのこっていて、なんとなく頭がはつきりしなかった。わたしはなんの理由もなくビーターズ夫人に反発したかったけれど、つかれていたの、それいじょうはだまっていた。

わたしたちはいっしょに階段をおりて居間へいき、食堂を通して台所へ出た。そこには、まじめくさった、大きな目で、わたしを見ている子どもがいた。その子たちは、わたしがぜんぜん知らないことや、めめようとしないうことを知っているのだ。

男の子はダニー・トレボート、女の子はキャロッタ・ベリー。

わたしは、その朝でさえも、キャロッタよりダニーのほうが好きだった。ダニーのほうがキャロッタより

おしゃべりでないという事実のほかに、ちょっとしたわけがあったのだけれど。

「あたしたちの学校にくるのね、そうでしょ。」

と、歓迎のあいさつを息もつかずにしゃべったあとで、キャロッタはきいた。キャロッタがあいさつのことを棒暗記していたことが、いまのわたしにはよくわかる。

「ママがね、あなたはあたしの組にはいるんですって。だってあたしとおなじ七つだもの——。」

そのとき、うしろに立っていたビーターズ夫人が、例のものやわらかな調子でくくくと口の中で声をたてた。

「さあさあ、朝ごはんのあとでなにをして遊んだらいいか、考えましようね。かくれんぼはどうかしらねえ、ダニー、あれはおもしろい遊びじゃないかしら。」

と、ビーターズ夫人はいった。

少年は、おもしろくない。

「そうです。この子が遊びたいなら。」

「いやよ。」

わたしは答えた。そして、くるりとみんなに背中を向けると、ひとつも口をきかず、ついてこられるものならきたらいい、といわんばかりに台所から出ていった。三人がわたしをじっと見つめたまま、こまっっているのがよくわかった。

コーデリアおばさんの家の中はよく知っていたが、そのときはまだ、なんとなくおそろしくて親しめなかった。